

研究テーマ：三原市における就学前の子どもの発達評価に関する研究・就学時の支援に向けて・	
研究代表者（職氏名）：教授 玉井ふみ	連絡先（E-mail等）： tamai@pu-hiroshima.ac.jp
共同研究者（職氏名）： 助教 堀江真由美，教授 林優子，講師 伊藤寿信，助教 土路生明美	

1. はじめに

就学前（5～6歳）になると、運動、認知、言語機能の発達や基本的な生活習慣の確立に加えて、仲間関係における共感性や協調性など対人関係や社会性の発達がめざましい。情緒が分化し、自己抑制が可能になり、役割を意識しながら友だちと仲良く遊ぶなど集団の中で適応的に行動することができるようになる。一方で、発達全般に明らかな遅れがあるわけではないが、認知、言語機能や行動特性に偏りがみられたり、子ども同士で関わってうまく遊べない子どもたちが問題となっており、従来の乳幼児健診では、気づかれにくいことが指摘されている。また、保育者は、保護者から子育てや子どもの発達、集団適応等に関する様々な相談や支援を求められ、対応に苦慮している現状がある。

そこで、本研究は、就学前に、社会性やコミュニケーションの発達、行動特性など発達全般を評価できる発達質問紙を開発することにより、保育を充実させ、より円滑な就学移行支援に結びつくような情報の共有化と共通理解を可能にすることを目的とする。

2. 方法

1) 事前調査

保育士23名（平均経験年数23年）を対象として、事前調査を行った。既存の発達質問紙（乳幼児精神発達質問紙、乳幼児発達スケール、遠城寺式・乳幼児分析的発達検査）から抜粋した年長児に対応する項目と、年長児の発達評価について保育士1名（経験年数30年）から収集した情報を参考に作成した項目について、発達を評価する際に各項目をどの程度重要視しているか、その他注目している行動、気

になる子どもを判断する際に注目する行動や基準に関するアンケートを実施した。

2) 本調査

(1) 発達質問紙試案の作成：発達質問紙試案は「運動」,「操作」,「言語」,「生活習慣」,「行動1」,「行動2」の6つの領域により構成した。評価項目は、既存の発達質問紙から抜粋した項目、既存の発達質問紙をわかりやすく修正した項目、事前調査の保育士の意見に基づいた項目を組み合わせて作成した。表1に各領域の項目数と出典の内訳を示した。「行動2」は発達や行動が気になる子どもの検出項目として加えた。項目の通過率は60%以上とした。
(2) 保育所年長児の発達調査：保育所の年長児クラスに在籍する幼児196名について、担当保育士と保護者に、それぞれ今回作成した発達質問紙試案への回答を求め調査を実施した。

3. 結果

1) 事前調査

保育士22名(96%)の回答が得られ、保育現場において、発達指標として注目されている項目、問題行動として捉えられている行動が挙げられた。

2) 本調査

(1) 回答者の概要：保育士記入年長児177名（男87名、女88名、未記入2名、回収率；83%）、保護者記入年長児147名（男69名、女78名、回収率；69%）の回答を得た。平均年齢は6歳0ヵ月（5歳6ヵ月～6歳6ヵ月）であった。
(2) 評価項目の通過率：「操作」,「言語」の各1項目を除き「運動」,「操作」,「生活習慣」,「行動1」の各領域の項目で通過率60%以上が得られた。しかし、操作「あやとりをして遊

ぶ」では、通過率に男女差がみられた（男児 50%以下、女児 77%）。また、言語「ある程度自分の住所が分かる」では保育士通過率 58%、保護者通過率 45%と、60%に達しなかった。

(3)「行動 2」の出現率：各項目の出現率を図 1 に示した。社会性や対人関係の問題を検出する項目とした 4 項目「社会性の問題」、「柔軟性の乏しさ」、「興味の偏り」、「感覚の偏り」は 6～24%であった。注意欠陥多動傾向の検出項目として加えた 4 項目のうち、「不注意：何かをしているときにすぐに気が散る」、「多動性：椅子に座っていると常にどこかが動いている」、「衝動性：話の途中で口を挟むことがある」の 3 項目で保育士、保護者とも出現率の高い傾向がみられた。特に「衝動性」では、保護者の 73%が「ある・ときどきある」と回答した。

(4)保育士と保護者との回答の一致率：全体の一致率は 82%であった。また、項目の未記入数は保育士に比し保護者の方が高い傾向が見られた。

4. 考察

今回作成した試案は、「操作」、「言語」各 1 項目および「行動 2」を除き、通過率 60%以上であり、年長児の発達評価項目として適切であったと考えられる。これは、事前調査での保育経験豊富な保育士の意見に基づき、既存の項目を具体的にし、現場の保育内容を取り入れたためと考えられる。保育士と保護者の一致率も高いことから、一方が判断できない項目は少ないと考えられる。しかし保護者の方が未記入欄数が多く、保護者にとって記入しやすい表現方法や項目内容を検討する必要がある。

「行動 2」について、今回用いた注意欠陥多動性の検出項目は、定型発達児にも多くあてはまり、「気になる」子どもとの区別は困難であった。支援の必要な子どもの発達スクリーニングとして用いるためには、今後さらに評価項目の検討が必要である。

表 1 発達質問紙試案の領域別項目数と内訳

領域	運動	操作	言語	生活習慣	行動 1	行動 2
項目数	9	9	22	9	14	8
内訳 既存	4	3	6	0	3	5
修正	2	4	2	5	4	0
保育士意見	3	2	14	4	7	3

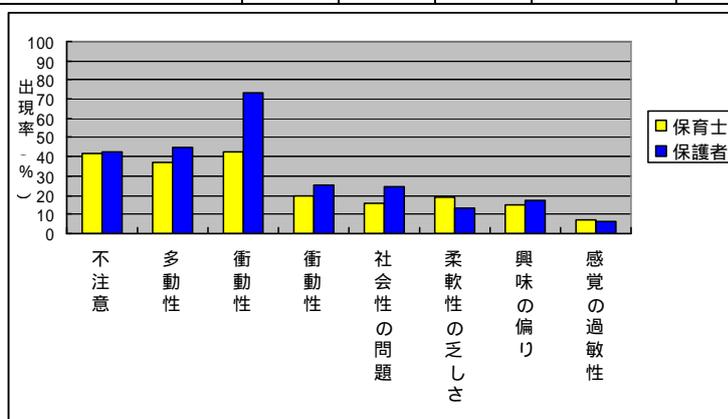


図 1 「行動 2」の出現率